

昭和 51 年度
(1976)

厳冬期奥大日尾根から劔岳・立山

昭和 51 (1976) 年 12 月 18 日～1 月 2 日

やはり劔岳は厳しい山でした。後半に襲ってきた大寒波のせいもあるでしょう。しかし、それも冬の山にしてみれば異常な出来事ではない筈です。前半は雪が少なく、特に稜線直下の雪壁は安定していてスムーズに通過でき、天候の崩れるまでに十分なエッセン、ガソリン、体力、気力を残しておけたことが無事下山の一つの要因であったと思えます。

しかし、前半の行程で予備を使っていたら、劔岳アタックその他などができなかったと言っているのはありません。でもその可能性は今回の状態からすれば十分に考えられるでしょう。

仮に大日の稜線まで行けない状態、すなわち入山が一週間遅れていたらの場合ですが、目標が劔岳・立山のアタック、大日稜線の縦走にあるのですから、山行自体は不成功に終わったに違いありません。しかし、合宿的な立場から見れば、稜線に立てなくても、十分役に立つ場であったと思います。今回はあまり雪上技術、生活技術の指導、特に一年生に対しては静か過ぎたように思えます。小生が一年生のときや、昨年の事故後の指導体制の反省の頃と比べてですが……。

やはり上級生も体力的、精神的に参っていたのでしょうか。本当は合宿としては、それは望ましくないと思うのですが、今となっては、それも一つの思い出となってしまいました。

どうも最近の我がクラブは、視界がきかないと、とんでもない方向に進む傾向にあります。また小屋使用のことですが、使おうが使うまいが、そんなことはそのときの気分によればいいのではないのでしょうか。小屋の横で無理にテントを張るのもおかしい光景です。

今回の冬山合宿は無事下山をもって一応成功しました。そして何よりも大事なことは、あの状態での劔岳・立山のアタック、胸までのラッセルをしての下山、などの経験から得られる自信ではないでしょうか。もちろん劔岳アタック、室堂への下山は最良の方法かといえば、何かひっかかる処もありますが、しかし“うちのクラブでもやれる”という自信を持たたことは確かです。それが何よりの収穫であり、エッセンの使い方とかその他がルーズになってきたことなどは、それに比べたら小さいものです。しかし、直さなければならぬことですが……。

今後の春山、来年度の山行にこの体験を生かさなければ、それは冬山をただ何となく終えてしまったことになるでしょう。

CL 須貝与志明

参加メンバー

CL 須貝与志明 SL 古橋孝夫 助っ人 吉田秀樹
 装備 師田信人 片山博彦 藤本泰弘 羽鎌田学
 食糧 藤元治朗 二俣勇司
 梱包 下田 章 田中誠司

会計 片山博彦
気象 古橋孝夫
医療 藤本泰弘
記録 下田 章 羽鎌田学

行動記録

12月18日 晴のち曇

松本～滑川～上市～伊折～馬場島

12月19日 雪

先発隊 1550m 地点ヘデポ～中山のコル手前

本隊 馬場島から往復ボッカ～中山のコル手前

12月20日 曇のち雪

先発隊 TS～クズバ山

本隊 TS～クズバ山

12月21日 快晴

先発隊 TS～西大谷山～2080mの台地、奥大日尾根の途中まで偵察

本隊 TS～西大谷山～2080mの台地

12月22日 曇のち雪

先発隊 TS～2550mのコル～稜線、後は本隊と合流

ひたすらラッセルを繰り返す、最後の雪面(約200m)フィックス。

本隊 TS～2550mのコル～稜線～室堂乗越～別山乗越

室堂側の吹き上げが強く、雪庇の大きさが段違いだ。風が非常に強く地吹雪、小屋に入りやっと生きた心地がした。

12月23日 雪 視界きかず、風強く沈殿

12月24日 雪

劔岳アタック隊、古橋、吉田、藤元、片山

チンタラと登り下りを繰り返す、下降に行き詰まり、劔沢へとルンゼを下り、黒百合のコル。一服劔は難なく越え、武蔵のコルへ、そこから前劔の斜面に取り付き(上部はかなり急)平になって小さなコルへ、ここより鎖がある。

アンザイレで1ピッチ(劔沢を捲くように)。平蔵のコルへの下りが雪壁になっておりアンザイレ(雪は安定している)。避難小屋の東大谷側

からの梯子を登り、上部の鎖を伝って上へ、ピーク手前はナイフリッジになっている。

立山アタック隊、須貝、二俣、師田、下田、羽鎌田、田中、藤本

強風の中、御前小屋を出発。一時朝日岳や劔岳が見えたが、すぐ視界が崩れた。地吹雪のため引き返し、小屋のなかで沈殿。

12月25日 曇のち雪

第二次劔岳アタック隊、須貝、二俣、師田、下田

風雪の中を劔岳を目指す。濃霧と降雪のため視界はきかず、劔御前からの下りで東大谷側へ迷い込み、昇り直す。再び稜線に戻りルンゼを下りしばらく歩むと劔岳山荘が右手に見えてきた。一服劔を越え前劔、わりと無難に通過する。東大谷側からの吹き上げは強い。降雪で視界は悪く、深雪のラッセルに悩まされる。平蔵のコルに着き小屋に逃げ込んでメシにする。ここでザイル、ガチャを再び取り出し、劔岳への最後のアタックにかかる。カニの横這いはザイルをフィックス、その上のガリーを登り、ゆるいルンゼ状雪面を登るとピークへの稜線に飛び出した。そして風雪の劔岳山頂に立つ。写真を撮りただちに下山にかかる。しかし、視界不良のためルートを見失い再びピークへ戻り、慎重に下降、それでも再度現在地不明になる。やむなくピークへ戻ろうとして、見覚えのある地形を見つけ、やっとのことでガリーの下り口に立つ。フィックスを回収し、平蔵のコルに辿り着いた。早く帰らねばと思っても、新雪に足をとられ思うように進まない。更に前劔からの下りでルートを見失う。尾根を右に左にトラバースして、やっとのことで見覚えのある岩峰を眼にする。前劔を下りきったときはさすがにホッとす。しかし、劔御前への登りで岩稜に行く手をさえぎられる。来るときにはルンゼを下降したとこだが、

ガスのために見落としていたのだ。やむなくザイル1ピッチ使用。すでに時刻は16:30、夜の帳が迫りつつあった。劔御前はピークが幾つも連なり、ラッセルに消耗する。暗くなりしばし目視が不明となり、さすがに4人とも焦燥の色が濃くなる。そのとき突然、ガスが切れた。三日月が煌々と輝きだした。遠く立山が望める。現在地を確認し、ひたすら小屋を目指す。やがて小屋の輪郭が闇夜に浮かんできた。コールを掛けると、中からライトの灯が漏れてきた。やっとの思いで小屋に駆け込む。差し出されたコーヒーのうまかったこと。

それにしてもビヴァークせずに済んで良かった。お月さんがあのとき照らしてくれなかったらどうなっていたかな。
(師田記)

第二次立山アタック隊 古橋、吉田、藤元、片山、田中、羽鎌田、藤本

ガスで視界が20mほど、風やや強し。途中別山の尾根に入り込んでしまっただけ池の付近で引き返す。あまり変化のない稜線を真砂岳目指して進む。天候は良くなり真砂岳をまいて富士の折立に着く。ここから引き返すことになる。帰りも風・ガス変わらず。

12月26日 雪 視界効かず、また風強いため沈殿

12月27日 雪 沈、沈、沈……ただひたすら沈殿

12月28日 雪 やっぱり今日も沈殿

12月29日 雪

今日は脱出のつもりで、パッキングして、完全装備になって、小屋にさよならしようと思ったが、上級生が偵察に行き、その結果またしても沈殿。

12月30日 雪、曇り 小屋～室堂乗越～立山連峰ホテル～地獄谷～室堂

相変わらず風強く、雪煙が舞う中を室堂乗越へ向かって下山。視界悪く、コンパスで確認しながら下る。2390m付近で偵察を出し、本隊はツェルトを被って一休み。方向を確認して地獄谷へ向

かって下る。川を渡り、金沢大診療所わきの川をまた渡り、上流へ向かう。硫黄の臭いがきつい。地獄谷へ出ている尾根をトラバース気味に左へ登る。そのあたりから方向を見失い、訳が分からないうちに室堂のあのでっかいバスターミナルが見えてホッとす。

12月31日 曇 室堂～弥陀ヶ原ホテル～追分小屋

風は殆ど無く、昨日に比べると視界はかなり良い。国見岳のスソを走るバス道に沿って行く。天狗平のあたりからラッセルがきつくなる。バス道の積雪は平均して4m。腰から上になってくる。(その頃はトップは空身ラッセル)

天気が良くなり富山平野がよく見える。立山荘から追分小屋間は若干雪が少なくなり楽になった。

1月1日 曇のち雪 追分小屋～上ノ小平

今日一日頑張れば、人家に辿り行けると思い、頑張るぞという気持になる。しかし、ラッセルは昨日以上になる。行けども行けども白い広野の中をただバス道のポール目指して進む。なかなか樹林帯に入らない。一本ごとに地図で確認するも自分の位置が分からない。昼を過ぎても、進みが思わしくない。皆精神的にも、体力的にもバテてきた。本当に胸までのラッセルなんて、身動きできないというのはこのことだ。

1月2日 曇のち雪 上ノ小平～ぶな小屋～美女平～立山駅～富山

今日こそは下山と思いつつも昨日のことを思うと意気消沈する。そして壮絶な二人ラッセル(二人とも空身)になる。空身だって胸までくるとしんどいとか疲れるとかなんてもんじゃなかった。2ピッチ目ぐらいで下からスキーで上がってきた三人パーティーに会う。助かったと思い、その後はスキーヤーのトレースを使わしてもらう。しかし、彼らのラッセルも途中でなくなり、昼頃だというのにまたラッセルだ。ぶな小屋あたりから段々浅くなってきて、1ピッチで美女平に着いたときは、全員大声をあげて喜んだ。あとはケーブ

ルのところを駆け下るようにして降り、トンネル内はアイゼンを着けスキー場の音楽を聴きながら

立山駅に着き、感激のビールを飲み、富山へ向かった。



● 剣岳頂上で（左から下田・須貝・師田）



● オオサクラソウ